

『平治物語』に見る平清盛

郭 順 伊

(一)

『保元物語』の平清盛に慎重さや無益な道を避ける傾向にある事、思慮深く策略家としての一面が見られる事を、拙稿「『保元物語』に見る平清盛」(広島女学院大学国語国文学誌 第三十七号、二〇〇七年十二月)において確認した。本稿では、保元の乱に続く平治の乱を描いた『平治物語』において清盛に関連する記事から、主に諸本間に見られる清盛像の異同と、『平家物語』との関わりについて言及していく事を目的とする。まずは、保元の乱で大將軍として後白河陣営に勝利を導いた義朝と清盛、両者のその後を平治の乱に至るまでの動きと共に見てゆく。

保元の乱から二年、保元三年八月、後白河天皇は東宮守仁親王(二条天皇)に讓位をし、後白河院政が開始するはずであった。しかし、実質的に政權を掌握したのは、保元の乱時から後白河院の近臣として力を振るつた信西である。『兵範記』はこの讓位を「唯佛與佛評定」によってなされたと記し、この「仏と仏」は信西と美福門院の二名であると、五味文彦氏は指摘する。美川圭氏は美福門院が王家領莊園の大半を相続したのに対し、後白河院は故鳥羽法王の莊園を繼承できず「経済的基盤に欠けており、とうていその意味でも王家の家長とはいえなかった」存在であるとする。そして事実上の院政は美福門院ではなく、もう一人の「仏」である信西がしきっている状態であったとも述べておら

れる。^③ そのような中、後白河院の寵臣である藤原信賴を中心に、源義朝率いる軍兵ら反信西勢力が、平治元年十二月九日挙兵したのである。信賴による謀反の発端を『愚管抄』は以下の通りに述べている。^④

大方信西ガ子ドモハ、法師ドモ、數シラズオホカルニモ、ミナホドノニヨキ者ニテ有ケル程ニ、コノ信西ヲ信賴ソネム心イデキテ、義朝・清盛、源氏・平氏ニテ候ケルヲ、各コノ亂ノ後ニ世ヲトラント思ヘリケル、義朝ト一ツ心ニナリテ、ハタト謀反ヲオコシテ、ソレモ義朝・信西、ソコニ意趣コボリニケルナリ。

〔愚管抄〕卷第五

『平治物語』は信賴が保元の乱で勝利した両大将の清盛と義朝のうち、義朝にのみ謀反を持ちかけた理由を、次のように記している。^⑤

子息新侍從信親を清盛が婿になしてちかづきよりて、平家の武威をもつて本意をとげばやと思けるが、清盛は大宰大貳たる上、大國あまた給つて、一族みな朝恩にはこり恨みなかりければ、よも同意せじとおもひ、源氏左馬頭義朝は、保元のみだれ以後、平家におほえ劣りて不快者なりと思ければ、ちかづきよりて懇のこゝろざしをぞかよはしける。

〔陽明本 上「信賴、信西を亡ぼさる議の事」〕

保元の乱の後、清盛と義朝に授与された恩賞の格差に対して、義朝の抱いた不満が平治の乱の一つの要因になったと考える記事は『保元物語』、『平治物語』ともに見られる。先に挙げた『平治物語』の記事もその一つである。合戦の最大の功勞者でありながら、清盛に劣る官職の授与を不服としていた義朝に、反信西派であり武力を要していた信賴が近付き促したという見方が出来る。『保元物語』には合戦後の清盛の昇進と自らの恩賞を比較し、不満を述べる義朝の言葉が次のように記されている。^⑥

夜に入て後、軍功の賞を行はる。義朝は右馬權頭に任じ、陸奥判官義康は昇殿ゆるさる。清盛は播磨守に成てン

げり。義朝申けるは、「此官は先祖満仲最初拝任の官也。其跡尤靱しといへども、本右馬權助也。今又權守に轉任か、強ちに勲功の賞ともおほえず、面目なきがごとし。義朝親父兄弟を捨て御方に參候し、父に向て弓を引。忠功他にことなり。しからば縦卿相の位に昇といふとも、誰か傾申べき。凡敵を亡す者は、半國を預上、其功世に絶ずとこそ承る。かゝらむにおゐては自今已後何のいさみ有てか朝敵をも追討すべき。」と申ければ、申所理なりとて、左馬頭隆季朝臣を左京大夫にうつされて、義朝左馬頭に轉ぜらる。

〔保元物語〕 金刀比羅本 中「調敵の宿所焼き拂ふ事」

合戦の恩賞として清盛は播磨守に義朝は右馬權頭に任命されたが、義朝が不満を訴えたため後に左馬頭に昇進した経緯が記されている。義朝の官職は『兵範記』にも、「右馬權頭源義朝」の表記が後日為義の処刑の記事では「左馬頭義朝」に変化している事が確認出来る。その背景に義朝が不満を訴えた事実があるかは分からないが、義朝の官職が最終的に当初の決定から転化した事は事実のようである。清盛が授与された播磨守は、『官職秘抄』によると、受領の中で「伊豫播磨四位上臈任之」と規定され、四位上臈は当時の受領の最高位を意味していた。さしたる功績もない清盛に最大の恩賞が授与され、最も奮闘した義朝は左馬頭という官職に留まったその格差が義朝の不服の原因とされている。しかしながら、元木泰雄氏は「乱以前の両者の官職に、大きな隔たりがあったことを無視してはならない」と指摘する。乱以前の清盛は既に安芸守として正四位下の位階にあった。一方の義朝は従五位下の下野守の受領であり、従来の両者の地位に差があったのである。元木泰雄氏は清盛、義朝「両者の経済力はもちろん、政治力の格差は歴然と言える」とし、保元、平治の乱に「平清盛と源義朝とが対等な立場で対抗していたかのような見方が根強い。しかし、そろそろそうした「源平対等」の歴史観から脱却する必要があるだろう」との見解を示されている。清盛を筆頭とする平家一門には合戦以前から築いてきた地位があり、そこに保元の乱の勝利貢献として、さらに立場を強化

する恩賞が与えられたという事である。しかしながら、『平治物語』は保元の乱を契機に昇進を重ね、確固たる地位を手に入れた人物として清盛を描き、清盛と対立する相手として義朝を描いているのである。その清盛の存在が物語中では義朝の不満要因となつてゆくのである。

【愚管抄】巻第五には信西の息子は憲を婿に迎えようとした義朝に対し、信西が「我子ハ學生ナリ。汝ガムコニアタハズ」と「アラキヤウナル返事」をして拒否した後、清盛の息子成範を婿にしたことから、「コ、ニハイカデカソノ意趣コモラザラン」と義朝が信西に遺恨を抱いた事情が記されている。またしても自らが劣位に置かれたと感じた義朝にとつて清盛も信西も氣に障る存在であり、その義朝の憤りが信頼の謀反の計画に乗じた理由とする見方が、『愚管抄』には強いようである。義朝が清盛や信西に不満を抱く一方で、上記したように清盛は息子成範を信西の娘と結婚させ、さらに前述した『平治物語』の引用にもあるように、信頼の嫡男信親とも娘が婚姻関係にあつたのである。^⑪ 信西と信頼どちらともに姻戚関係を結んでおり、保元の乱時と同様にどちらか一方を強く支持するのではなく、保元の乱後も最大勢力の武門を統率しながら信西と信頼の間で中立的な立場を取つていたのではないだろうか。

(二)

『平治物語』が『平家物語』の影響下に発展し、『平治物語』の展開にとつて『平家物語』の存在が不可欠であることや、『平家物語』の成立以前に『平治物語』が完成されていたという認識は、現存『平治物語』を対象とする限り、改めて問い直されなければならない問題であるという日下力氏の指摘は、『平治物語』と『平家物語』の交渉関係を論じる中で詳細な比較を通し立証されてきた事である。その根拠の一つに『平家物語』の清盛との類似性を示

しておられる。日下力氏は『平治物語』諸本中、第一類本の陽明本・学習院本等古態本から第三類本以下の諸本にかけて、その成立過程に『平家物語』との密接な関係が生じ、清盛像を含むいくつかの「人物像の改変」が行われていると論じておられる。¹³既に指摘されている事例であるが、『平治物語』清盛像の諸本間の変化と、後出本と『平家物語』との類似点が見られる二つの場面を確認する。一つ目は六波羅合戦の清盛の様子、二つ目は義朝の愛妾常葉との対面の場面である。まずは六波羅合戦の場面から見ていく。

大將軍清盛ハヒタ黒ニサウゾキテ、カチノ直垂ニ黒革オドシノ鎧ニヌリノ、矢オイテ、黒キ馬ニ乗テ御所ノ中門ノ廊ニ引ヨセテ、大鍬形ノ甲取テ着テ緒シメ打出ケレバ、歩武者ノ侍ニ三十人馬ニソヒテ走りメグリテ、「物サハガシク候。見候ハン」ト云テ、ハタ／＼ト打出ケルコソ、時ニトリテヨニタノモシカリケレ。

〔愚管抄〕巻第五

右の文は『愚管抄』が記す六波羅合戦の清盛の様子である。黒い装束を身につけ「時ニトリテヨニタノモシカリケレ」と評される清盛の勇姿は、『平治物語』中にも以下のように記され、清盛の黒色を中心とした装いは『愚管抄』とは一致する文面となっている。

大式清盛、北の対の西の妻戸の間に、軍下知して居たりけるが、妻戸の扉に、敵のいる矢が雨のふるごとくにあたりければ、大式清盛、大に忿て、「恥ある侍がなければこそ、これまで敵を近づくれ。のけや、清盛かけん」とて、甲の緒をしめて、妻戸の間よりつツと出、庭に立たる馬を縁のきはへ引よせて、ひたとのる。清盛、其日の装束には、飾磨の褐の直垂に、黒糸綴の鎧、塗り籠に黒保呂はぎたる矢の、十八さしたるを負まゝに、塗籠藤の弓をぞ持たりける。黒漆の太刀に、熊の皮のつらぬきをぞはいたりける。黒馬の七寸ばかりなる太逞に、黒鞍をきてぞのりたりける。下より上までおとなしやかに、真黒にこそ装束たれ。冑ばかりは、銀をもッて大鍬形を

うちたりければ、白く耀て人にかはり、あはれ大将やと見えし。

(学習院本 中「六波羅合戦の事」)

清盛宣ひける、「かひくしく防ぐ者なければこそ、敵は是まで近付らめ。清盛さらばかけん。」とて、かちんのひたゝれに黒糸おどしの鎧に、黒漆の太刀はき、くろづはの矢を、い、ぬりごめどうのゆみもつて、黒の馬に黒くらをかせてのり給へり。「何か源氏の大將軍ぞ。かう申は大宰大貳清盛。げんざむ。」とぞのたまひける。

(金刀比羅本 中「六波羅合戦の事」)

学習院本、金刀比羅本いずれも六波羅合戦の清盛の様子を描いたものである。先に取り上げた『愚管抄』の清盛の装束や、「恥ある侍がなければこそ、これまで敵を近づくれ。のけや、清盛かけん」(学習院本)、また「かひくしく防ぐ者なければこそ、敵は是まで近付らめ。清盛さらばかけん」(金刀比羅本)など真つ先に敵陣に挑んで行く清盛の姿が描かれている。この『平治物語』の場面と『愚管抄』の記事とを合わせると、清盛が六波羅合戦に積極的に立ち向かつていく様が見受けられるだろう。しかし、『平治物語』後出本では清盛の積極的な姿を描く一方で、六波羅合戦の戦闘開始の場面には清盛の対照的な模様が描かれているのである。

六波羅には、五條のはしをこぼちよせて、かいだてにこしらへてまつところに、義朝押よせ、時をどつとつくる。清盛時の聲におどろきて、物具せられけるが、甲をとつて逆に着給へば、侍共、「御甲さかさまに候。」と申せば、臆してやみゆらんとおもはれければ、「主上是にわたらせ給へば、敵のかたへ向はさ、君を後になしまいらせむがおそれなれば、さて甲をば逆にきるぞかし。」とぞ宣ひける。左衛門佐重盛、「なにと宣ども、臆してこそみえられつれ。」とて、五百余騎にて打立て防かれける。

(金刀比羅本 中「義朝六波羅に寄せらるる事並びに頼政心替りの事」)

義朝軍の聞の聲に驚いた清盛が甲を逆さまにかぶり狼狽するという姿である。古態本の学習院本にこのような清盛

の姿は描かれておらず、六波羅合戦では先に取り上げた味方の兵を叱咤しながら先頭に立つ清盛の姿のみを古態本は捉えている事になろう。古態本にはない清盛の様子は後出本が清盛を戯画化した後の創作と考えられ、これと類似する記事が以下に引用した『平家物語』『教訓状』に見られる。⁽¹⁴⁾

小松殿、烏帽子直衣に大文の指貫そばとツて、ざやめき入給へば、事の外にぞ見えられける。入道ふし目になつて、「あはれ、例の内府が世をへうする様にふるまう。大に諫ばや」とこそ思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒をたもつて慈悲を先とし、外には五常をみだらず礼義をたゞしうし給ふ人なれば、あのすがたに、腹巻を着て向はむ事、おもばゆうはづかしうや思はれけむ、障子をすこし引立てて、素絹の衣を腹巻の上にあはて着に給ひたりけるが、むないたの金物のすこしはづれて見えけるをかくさうど、頻に衣のむねを引ちがへくぞし給ひける。

（『平家物語』 覚一本巻第二「教訓状」）

鹿谷の陰謀発覚により烏羽殿に幽閉されようとする後白河法皇の事を聞き、駆けつけた重盛と対面する清盛の様子である。重盛の訪問に法皇幽閉を企む清盛は、後ろめたい思いがあつたのか「ふし目になつて」、さらに着用していた鎧の上に、重盛に配慮するため衣を「あはて着に」身につけたため、鎧の金物を隠そうと衣を頻りに引つ張っている姿が描かれる。金刀比羅本で関の声に驚き甲を逆さまにかぶつた姿や、臣下達に対して「臆してやみゆらん」と思ひ弁明する清盛の態度は、『平家物語』で「腹巻を着て向はむ事、おもばゆうはづかしう」と思い慌てて衣を着用した衣装の乱れと、重盛を対置とする取り繕う姿や焦る様子とも重なるであらう。重盛との対面に清盛の落ち着かない様子が現れ、敵軍の関の声に慌てて甲を逆さまにかぶつた金刀比羅本の清盛と、装具を通して心の動揺が表出するという共通点も見られるのである。また、清盛が自身の冷静さを失つた様子を後に弁明する姿は、『平家物語』に合戦とは関係のない記事の中にも確認出来る。

か、りしか共、中宮はひまなくしきらせ給ふばかりにて、御産もとみに成やらず。入道相国・二位殿胸に手をおいて、「こはいかにせん、いかにせん」とぞあきれ給ふ。人の物申けれ共、たゞ「ともかうも、能様にく」とぞの給ける。「さり共いくさの陣ならば、是程淨海は臆せじ物を」とぞ、後には仰られる。

〔平家物語〕覚一本巻第三「御産」

清盛の娘である中宮徳子の出産の折、清盛は妻の二位殿と胸に手を置き途方にくれるばかりであつたが、後に合戦の場ではこれほどに気後れした態度はしないと、娘の御産で見せた清盛の落ち着きなさを隠す発言をしている。金刀比羅本の清盛も『平家物語』の清盛も、対象は周囲の人々であり、臣下達であり、また重盛個人であつたりするのだが、いずれも清盛が自身の情けない姿や恥だと思われる態度を訂正するため、焦りや慌てた様子が窺える場面となっているであらう。

直接清盛に関連する記事ではないが、『平家物語』に清盛がまだ存命の頃嫡孫維盛が大將軍として出陣した静岡県富士川の合戦で、水鳥が一斉に飛び立つ羽音を源氏の襲来と勘違いし、

とる物もとりあへず、我さきにとぞ落ゆきける。あまりにあはてさはいで、弓とる物は矢を知らず、矢とる者は弓を知らず。人の馬にはわれ乗り、わが馬をば人に乗らる。或はつないだる馬に乗つてはすれば、くゐをめぐる事かぎりなし。

〔平家物語〕覚一本巻第五「富士川」

と、戦闘開始の前に平家方の者達が遁走してしまつた記事が載る。慌てて取り乱し弓矢を忘れ、馬を乗り違え逃げ出した有様は、後に「いくさには見にげといふ事をだに心憂き事にこそするに、これは聞きにげし給ひたり」と嘲笑の対象になつたとある。「富士川」に見られる敵の攻撃に恐れる気持ちが武具の完備を二の次にさせた侍達の姿を考えると、金刀比羅本の清盛は逃げ出してこそいいが、関の声に対する驚愕が甲を逆さまにするという行動を招き、そ

の言い訳として「君を後になしまいらせむがおそれなれば、さて甲をば逆にきるぞかし」と弁明するものの、重盛に指摘された通り関の聲に驚いた清盛がうろたえた結果の気後れしてしまった様である。清盛の慌てふためく様子や、怖気づいていると思われぬよう臣下達に主上のためと誤魔化す弁解は、後出本において清盛が矮小化された描写の一つであり、また古態本に比べ清盛のより多くの感情が描き込まれた場面ともなっているであろう。古態本と共通する六波羅合戦の活気ある姿だけでなく、驚きや狼狽や弁解を通して人間の多様な内面が含まれる清盛像が描かれているようである。

次に敗北した義朝の愛妾常葉と幼い三人の息子らの処置を巡る清盛の態度を確認する。金刀比羅本は清盛が義朝の遺児である三人の息子を助命した理由を、常葉に対する清盛の「よしなき心」によってであると説明する。常葉は評判の美貌の持ち主で、その美しさに魅了された清盛が、

常葉が姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。清盛宣ひけるは、「大かたとりをこなふにてこそ候へ。さればとていかでか情なきことあるべき。」とて、景綱がもとへかへされけり。

(金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」)

と、義朝と常葉の子供ら三人を処刑の対象から外したのである。常葉と対面する以前の清盛は「たづねいだし、めのまへにてみなうしなふべし。」と発言しており、清盛の一転した態度は常葉に対する心移りであると金刀比羅本は説明する。さらに清盛は、

其後常葉のもとへ御ふみをつかはされけれども、御返事も申さねば、「三人のをさあひ者どもをたすくべし。したがはずは、めのまへにてうしなふべし。」とのたまひければ

(同右)

とあるように、後に幼子達の殺害を脅かしてまで常葉に言い寄る姿が描かれているのである。小番達氏は常葉に対す

る金刀比羅本の清盛を「後出本における清盛の矮小化・卑小化の一例」とし、常葉の美貌が「好色で横暴な清盛像を造型」したとの指摘をされる。¹⁶⁾

清盛の好色と横暴さが際立つ説話として『平家物語』『祇王』の章段がある。清盛は最愛していた白拍子の祇王がいながら、別の白拍子の仏御前に対し、「心も及ばず舞ひすましたりければ、入道相国舞にめで給ひて、仏に心に移されけり。」と瞬時に心変わりを見せるのである。そして、冷酷な扱いで祇王を追いついた後に仏御前の退屈を紛らわすため再び祇王を呼び寄せる。返事を拒否した祇王に対し「など祇王は返事はせぬぞ。参るまじひか。参るまじくはそのやうを申せ。浄海もはからふむねあり」という脅迫めいた手段に出るなど、清盛の自己中心的な態度が顕著に見え、『平家物語』金刀比羅本の常葉に対する扱いと、「祇王」に見られる清盛の態度と重なる点が多いのである。古態本には清盛が常葉に恋慕したとする記述は一切なく、「義朝が子共の事、私に清盛がはからふべきにあらず。賞罰の事は、勅定にまかせて奉行するばかり也。猶うかゝひて、天氣にこそよらめ」と、処遇は天皇の意向に委ね自身が判断すべきではないと言う清盛の言葉や、その言葉の前には、幼子の六子の發言に涙し情に脆い一面を見せるなど、清盛が常葉に思いを寄せる直接的な表現や、出仕と子供らの命と引き替えに脅すような描写はなく、金刀比羅本に見える清盛の言動は後出本によって改変されたものである。『平家物語』金刀比羅本の清盛に『平家物語』の清盛像と重なる点がいくつか確認出来る事から、六波羅合戦の清盛像や常葉の対面に見られる清盛像は、金刀比羅本が成立する過程の中で『平家物語』の影響下に古態本の清盛像が変化した結果であると捉える事も出来る。ここで取り上げた場面の清盛は古態本に勇武で物怖じせず情に深い面が強く、一方の後出本では狼狽する姿や好色的な面など清盛の直情的な態度も窺え、『平家物語』諸本間に清盛像の大きな差異が見られ、その一因に『平家物語』の介入という可能性も考えられるだろう。

(三)

『平治物語』の古態本から後出本にかけて清盛の描写に変化が見られ、さらに『平家物語』の影響を受けたと思われる場面について確認してきた。先に取り上げた二つの例は諸本間での相違が明らかで、『平治物語』の清盛像が古態本と後出本と相対して異なる形象にある事を示した場面である。そして、特に清盛が甲を逆さまにかぶる場面などから『平治物語』の後出本にかけて清盛の矮小化が見られるという考察は永積安明氏などによって指摘されたところである。¹⁷ それでは、『平治物語』の古態本から後出本にかけて清盛の著しい矮小化が他の場面に確認できるのであるか、先述した二例とは別の清盛の描写を見ていきたい。

平治元年十二月四日、「大宰大貳清盛、宿願ありけるによつて、嫡男左衛門佐重盛あいぐして、熊野参詣ありけり。かゝるひまをえて、信頼、義朝をまねきて」(陽明本) 十二月九日院御所三条殿を急襲したのである。保元の乱を経て一族を中心に最大の武力を保持する清盛を懸念した信頼が、清盛の留守を狙い攻撃したとする記述である。『百鍊抄』には平治元年十二月九日条に、「夜、右衛門督信頼卿、前下野守義朝等謀反。放火上皇三條烏丸御所、奉移上皇上西門院於一本御書所。」と記録される。信頼は後白河院と姉の上西門院を連れ出して一品御書所に幽閉、三条殿を包囲して火を放ち、『平治物語』陽明本に依ると炎から逃れる者を皆「何も信西が一族にてぞあるらん」と憎き信西とその一族を滅ぼすべく、「公卿・殿上人・局の女房たち」らを悉く殺害したとある。京を離れ熊野参詣の途中であった清盛の許に、信頼拳兵の急報が届いたのは切目の宿での事である。陽明本に依ると、

これまで参りたれども、朝家の御大事、出来るうへは、先達ばかりをまいらせて、下するよりほかは他事なし。

(陽明本 上「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」)

と京へ引き返すべく帰洛の決意を清盛自身が判断するが、金刀比羅本では、

清盛、「熊野参詣をとげべきか。是より歸べきか。」との給へば、左衛門佐重盛申されけるは、「熊野御参詣候も、現當安穩の御祈禱の御爲にてこそ候へ。敵を後に置ながら御参詣如何。」と申されければ

(金比羅本 上「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」)

と帰洛を悩む清盛に重盛が京へ引き返すよう進言する。陽明本の清盛が帰洛を即断したのに対し、金刀比羅本では重盛の意見により帰京が決定し、金刀比羅本の清盛には判断に躊躇する様子が窺えるだろう。その後、義朝の嫡子悪源太義平が阿倍野で待ち構えているとの風聞を聞いた清盛は、

悪源太、大勢にて待んには、都へのほりえずして、阿倍野・天王寺の間にしかばねをとめんこと、理の勇士にあるべからず。しよせん当国の浦より船をあつめて、四国の地にをしわたり、鎮西の軍勢をもよほし都へせめのほりて、逆臣をほろぼし、君の御いきどをりを休めたてまつらばやと存する。(陽明本)

と四国へ渡り九州から兵を召集し多勢でもって攻撃する提案をする。この清盛の提案は金刀比羅本にも「此無勢にて多勢に向、討れむ事こそ無念なれ。是より四國に渡り、兵どもを催て、後日に都へ入ばや。」と陽明本と同様の内容で入京する前に少数である劣勢な状態を立て直すため、敵軍に対抗できる万全の対策を備えようとする清盛の考えがある。その清盛の提案に対し重盛は以下のように主張するのである。

此おほせ、さる御ことにて候へども、重盛が愚案には、院内を大内にとりこめたてまつるうへは、いまはさだめて諸国へ宣旨・院宣をぞなし下らん。朝敵に成ては、四国・九国の軍勢も、さらにしたがふべからず。君の御事と申、六波羅の留守のためといふ、公私につきて、しばらくもとこほるべからず。(陽明本)

帝や院が敵軍に捕われている今、清盛軍討伐の宣旨や院宣が下される前に一刻でも早く帰京するべきとの提案をし、結果、重盛の見解に臣下達や清盛も同意して即刻都へ引き返す事となる。重盛の明快な主張は、

げにもさやうに候て、うちまいらせよといふ院宣の旨国々へ下候は、背者ども一人も候まじ。多勢を以て無勢を討は常のこと。今度無勢なりとも、懸向て即時に討死したらば、後代の名も然べしとおもふは如何、家貞。

(金刀比羅本)

と金刀比羅本にも見られる。清盛の提案とそれに対する重盛の意見とのやり取りは、陽明本、金刀比羅本ともにほぼ同じ内容となるだろう。

陽明本は続けて、金刀比羅本にはない従者に進退を問う重盛の姿を描いている。

重盛、前後の勢を見亘して、「悪源太が待と聞阿倍野にて討死せん事、たゞいまなり。少も後ろ足をふまん人々は、戦場にてにげんは見ぐるしかるべし、こゝよりいとま申て留れ」とのたまいければ、兵共、みな、御返事にはすゝむにしかじとて、をのゝ前を諍うつほどに、和泉・紀伊の国のさかひなる小野山にこそつきにけれ。(陽明本)

重盛は兵達に去就を委ねるが離脱者は一人も出ず、重盛を中心とした主従関係の結束の強さが窺える場面であろう。故に、久保田淳氏は熊野参詣道中の場面において「重盛の理想化」が最も進んでいるのは陽明本だとし、金刀比羅本に「清盛の矮小化が目立つ」と論じておられる¹⁸⁾。確かに、金刀比羅本では参詣途中で帰京すべきか即断出来ず、重盛に従い帰参する旨を決定した清盛の姿があるため、金刀比羅本は陽明本に比べ清盛が矮小化されていると感じられるだろう。しかしこの場面は重盛の理想化が強調される故に、重盛に対して清盛の言動が劣って見える傾向にあるのではないだろうか。『愚管抄』によると清盛の熊野参詣に同行したのは、「子ドモ二ハ越前守基盛ト、十三ニナル淡路守宗盛ト、侍十五人トゾグシタリケル。」とあるように、清盛に随行したのは基盛と宗盛であり、重盛の姿は見られ

ないのである。この『愚管抄』の記事が事実とするならば、古態本の段階から実際にはいなかった重盛を設定させた『平治物語』の虚構性の高い場面となるだろう。

『平治物語』の重盛像について日下力氏は、

一類本においては、彼の冷淡さや軽率さ、腹立ちまぎれの言動などを描きこみ、一貫してリアルな人間を浮びあがらせているのに対し、三類本以下の諸本では、平家物語の影響、或いはそれと共通の地盤に立った重盛像となっていることは明らかと思われる。

との見解を示し、清盛だけでなく、『平家物語』影響下にある『平治物語』重盛像の変化についても指摘されている。¹⁹⁾ また、田中宣一氏も金刀比羅本の人物像について、その一例として重盛像に言及され、「金刀本には『平家物語』的な匂いが極めて濃い」とし、「作者の念頭に何らかの『平家物語』が存在しており、そこに登場する人物の影響を陰に陽に受けてのものと判断すべきだと思う」と述べておられる。²⁰⁾

『平治物語』諸本が削除、増補を繰り返しながら展開し成長するその一端に、『平家物語』を享受した傾向が強く見られるという特徴は、(二)において『平治物語』の清盛像造型にも深く関わる事であると記した。しかし、ここで取り上げた熊野参詣道中の場面では、『愚管抄』を見る限り史実には確認できない重盛の同行を設定し、古態本の段階で『平家物語』に類似する父を論す重盛像が既に作り上げられているのである。『愚管抄』に確認できなかった重盛の同行が『平治物語』による虚構であるならば、あえて登場させた重盛に多く筆を費やす可能性は考えられ、実際、重盛は金刀比羅本に見られる清盛に帰京を進言する姿や、陽明本、金刀比羅本の明快な主張など物語中で目立つ存在にある。虚構と思われる重盛の登場を設定し主要人物とする事で、この場面での清盛の存在感が後退し、重盛と対比する事によって清盛像の矮小化が目立つと捉えられているのではないだろうか。理想化された重盛の一方で、清盛個

人の言動が如何なるものであつたか注意して見ていく必要がある。

陽明本、金刀比羅本両方に見られる九州の兵を召集する清盛の対処案には、少数である軍の劣勢な状態を立て直すため、清盛が慎重に戦法を考慮している様子が窺えるだろう。重盛の賢明な見解が示されたため、清盛の提案は却下され重盛に従う事になったが、清盛が思慮した多勢でもって攻撃するという案も決して取るに足りない無謀な手段ではなかったはずである。清盛の提案は陽明本、金刀比羅本ともに危機と直面した際、少人数という不利益な状況を回避しようとする慎重に作戦を思案する姿とも見受けられる。重盛の発言の優秀さが際立つその一方で、清盛の提案も妥当性があり状況を鋭く見極めようとした姿が、『平治物語』古態本、後出本ともに描かれていると捉える事も可能ではないだろうか。清盛の考えに対し、それよりも勝る優れた意見が重盛から示されたため、重盛に比べると清盛の存在が卑小に感じ、見劣りしているようにも思えるが、清盛単独の言動に注目した場合、清盛の貧弱さが表面化しているというより、『保元物語』の清盛にも見られたように危機と直面した際、不利益な道を渡らず切り抜けようとする清盛の慎重さが表れているとも受け取れる。

金刀比羅本は後に信頼、義朝らによつて一品御書所に幽閉されていた後白河上皇や二条天皇を六波羅へ奪取した後、公卿僉議に清盛が呼ばれ意見する様子を描いている。

さるほどに六波羅には公卿僉議ありて、清盛をめされけり。かちんのひた、れに黒糸をどしの腹巻に、左右の籠手をさし、おりえほし引立、大床にかしこまる。頭中将實國をもつておほせくだされけるは、「皇事もろきことなければ、逆臣ほろびん事うたがひなし。但新造の皇居、よく思慮あるべきか。廻録の災あらば、朝家の御大事たるべし。官軍いつはりて引退ば、凶徒たちまちにす、みいでんか。其時官軍を入替て皇居を守護せば、火災あるべからず。」とおほせくだされけり。清盛畏まつて奏しけるは、「私の宿意に候とも、いかで候べき。いはん

や朝敵を亡ぼして逆鱗をやすめまいらせむこと、時剋をめぐらし候まじ。」とて出られける。氣色優にぞおぼえける。主上わたらせ給へは、清盛は六波羅の固めにとまる。

(金刀比羅本 中「待賢門の軍の事付けたり信頼落つる事」)

古態本では僉議の場面に清盛は登場しておらず、清盛に対して「氣色優にぞおぼえける」という評価を金刀比羅本が記している事もまた、後出本において清盛が卑小化されるという画一的な見方が出来ない点であろう。山下宏明氏が述べる「武士の棟梁と呼ぶにふさわしい行動と決断力の持ち主⁽⁴⁾」として清盛が古態本に強く見られる一方で、後出本もまた六波羅合戦の清盛の装束を含む描写や、公卿僉議に見せる清盛の頼もしい姿は古態本と共通する大將軍としての勇壮さを見る事が出来る。そして、熊野参詣道中から帰京までの重盛とのやり取りは、清盛個人の言動から慎重な戦法考慮や難局を切り抜けようとする思慮深さも窺え、重盛に劣るだけの矮小化された清盛像とは言い切れないであろう。甲を逆さまにかぶり狼狽する姿や自己の言動を正当化するための弁解、また常葉に対する好色的な面や処分を一変してしまう単純さなどを描きこむ事で、後出本の清盛には理想化された大將軍としての勇猛さと、その一方的な傾向だけではなく、より多くの感情や通俗的な姿が見られるのである。

注

- (1) 『兵範記』保元三年八月四日条。
- (2) 五味文彦氏『人物叢書 平清盛』(吉川弘文館、一九九九年一月)。
- (3) 美川圭氏『院政 もうひとつの天皇制』(中央公論新社、二〇〇六年十月)。
- (4) 『愚管抄』本文の引用は『日本古典文学大系 愚管抄』(岩波書店、一九六七年一月)を使用した。
- (5) 『平治物語』本文の引用は以下のテキストを使用した。

- 上巻 陽明本・中下巻 学習院本…『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店、一九九二年七月)。
 ○ 金刀比羅本…『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一年七月)。
 (6) 『保元物語』本文の引用は『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一年七月)を使用した。
 (7) 『兵範記』保元元年七月十一日条「今夕被行勲功賞、播磨守平清盛、右馬權頭源義朝」。保元元年七月廿八日条「為義、頼方、頼仲、為成、為宗、九郎、已上左馬頭義朝、於船岡邊斬之」。七月十一日と廿八日で義朝の官職名が異なっている事が確認できる。
 (8) 『官職秘抄』「諸国(有)大上中下國」。守 舊吏新敘。(蔵人。式部。民部。外記。史。檢非違使)。院官坊官。別進成功之輩。隨國隨人任之。不次拜任之者。不足爲例。但伊豫播磨四位上賜任之。」(一)内は割注。
 (9) 元木泰雄氏「保元・平治の乱を読みなおす」(日本放送出版協会、二〇〇四年十二月)。
 (10) 『愚管抄』巻第五「信西ガ子ニ是憲トテ信乃入道トテ、西山吉峰ノ往生院ニテ最後十念成就シテ決定往生シタリト世ニ云聖ノアリシガ、男ニテサカリノ折フシニシアリシヲサ、ヘテ、「ムコニトラシ」ト義朝ガ云ケルヲ、「我子ハ學生ナリ。汝ガムコニアタハズ」ト云アラキヤウナル返事ヲシテキカザリケル程ニ、ヤガテ程ナク當時ノ妻ノキノ二位ガ腹ナルシゲノリヲ清盛ガムコニナシテケルナリ。コ、ニハイカデカソノ意趣コモラザラン」。
 (11) 『古事談』巻第四 勇士 二六「平治合戦の時、六波羅入道、南山より帰洛の翌日、鐔の侍從信親信頼卿の息を父の許に送り遣はす侍四人、皆な布衣にて下腹巻を着せり。(後略)」(『新日本古典文学大系 古事談 続古事談』岩波書店、二〇〇五年十一月)。「古事談」にも清盛が信頼の息子を鐔にしていた記述が見られる。
 (12) 日下力氏「『平家物語』と『平治物語』——交渉関係の吟味——」(『国文学研究』六十五巻号、一九七八年六月)。また、早川厚一氏は日下力氏の論を検証しながら、「決定的な根拠は依然として示せないままだが」と留意しながら、「平治物語」の生成に『平家物語』の影響があるという説は、一応認められるのではないかと提示された。(早川厚一氏「平治物語」成立論の検証——『平家物語』との関係について——『名古屋学院大学論集』第十八巻一号、二〇〇六年十月)。
 (13) 注(12)に同じ。
 (14) 『平家物語』本文の引用は『新日本古典文学大系 平家物語 上』(岩波書店、一九九一年六月)を使用した。
 (15) 「常葉生年二十三、九条女院の後たちの御時、都の中よりみめよき女を千人そろへて、そのなかより百人、又百人が中より

十人すぐりいだされける。其中にも常葉一とぞきこえける。千人が中の一なれば、さこそはうつくしかりけめ。異國に聞えし李夫人・楊貴妃・我朝には小野小町・和泉式部もこれにはすぎしとぞみえし。」(金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」)

金刀比羅本の記事とはは同内容の記事が、古態本にも確認出来る。

(16) 小番達氏「平清盛と常葉」(『国文学解釈と鑑賞』第七十一巻十二号、二〇〇六年十二月)。

(17) 永積安明氏「中世文学の成立」(岩波書店、一九六三年六月)。

(18) 久保田淳氏「平治物語」の世界——その人物造型を中心として」(『国文学解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 平家物語上』一九七八年三月)。

(19) 日下力氏「平治物語の古態性について——高阪説・笠越をめぐる疑問——」(『古典遺産』第十二号、一九七〇年十二月)。

(20) 田中宣一氏「金刀比羅宮所蔵『平治物語』について」(『国学院雑誌』第七十二巻七号、一九七一年七月)。

(21) 山下宏明氏「保元・平治物語」における清盛像」(『保元物語・平治物語』第九号、一九七六年九月)。